

子ども達のための古民家再生—神林家住宅

Historical folk house playback for children - Kanbayashi house

平山育男
Ikuo HIRAYAMA

The Kanbayashi house was constructed in 1903. This business utilizes the historical private house for the children.

Keywords: Historical folk house, Restoration
古民家、修復

概要

本稿で扱う神林家は新潟県刈羽郡刈羽村油田2981番地に所在する住宅である。

神林家が所在する油田^{あぶらでん}へは長岡から以下のような道のりとなる。国道8号線を柏崎市に向けて進むと道は次第に山間となり、長岡市大積町に入る。幾つかのカーブを越えて「千本」の集落に差し



外観 南より

掛かると、道路に面する斜面に茅葺の民家が散見されてくる。やがて長岡市の一番西奥となる田代の交差点に達するが、ここで妙法寺峠越えて刈羽に抜ける県道383号礼拝長岡線方面に右折すると、そこが油田の地である。油田は刈羽村の飛地で、世帯数50戸程の集落である。県道を進むと道は2股に別れるが、これを更に左手へ折れる。道は段々と傾斜が厳しくなり、最後は砂利道となり、冬期間通行禁止の看板も見ることができ、辺りには茅葺の民家が2棟見受けられる。突き当たりを右折すると左手の視界が一気に広がって来る。そして2筋の谷が落ち、その懐に佇んでいる建物が神林家住宅である。

油田の地名は油田開発に起因するものとされ、周辺では古くから草生津—石油の採掘が行われたという。油田の石油は江戸時代から採掘があり、先程進んで来た県道の2股角に位置する油田鉱泉は石油採掘者が180年程前に井戸の採掘に際して偶然発見したものである。なお、神林家の整備に際して裏山から湧水を引いたものの、鉄分、油分が多く、飲用に適する水は容易に引くことはできなかった。

神林家の正面は田圃と傍らに畑が一部広がり、背面は植林されたスギや竹林が混じるやや勾配が急な丘陵となっている。住宅の庭は比較的狭く、東側に穿かれた池には裏山からの湧水が溜められ、鯉が放たれている。

建物の概要

敷地には南面して主屋が建つのみである。主屋は平家建茅葺寄棟造の形式で、正面桁行8間半、梁行5間で、4間の上屋梁間の4周に下屋を巡らすものである。

入口は正面ほぼ中央に別屋根でトタン—文字葺の玄関と、東側面表側に脇からの出入口がある。平面は中央からやや下がった柱列で前後に2分され、各々4室を配する。正面下屋に便所、旧風呂、背面下屋に水廻りの風呂と台所を設ける。主屋の正面側は下手から2間半四方の12畳半(板の間)、10畳(板の間)、7畳半、10畳で上手に床の間を置き、12畳半(板の間)は低い高さに床が張られ、土足使いで、北東隅には物入が設けられていた。裏側は6畳(板の間)、囲炉裏を持つ12畳(板の間)、4畳半、裏側に床の間と押入を持つ6畳となる。畳はすべて長辺5.8尺、短手2尺9寸5分の寸法で平面計画は内法制で行われていた。なお、小屋裏は物置として4層目までが用いられ、2層目への階段が裏側列12畳(板の間)から登る形式で配され、2層目は上手2室を除く全面に広がる。

柱はケヤキ材で東側10畳北西隅に建つ柱が最も太く、桁行2.28尺、梁行2.23尺とややご平の断面である。次いで太いのはこれに相対する同室北東隅の柱で2.10尺角であった。内法は表側の各室の梁行境、下手10畳、7畳半、北面及び裏側4畳半の梁行を松材で材寸が1.28尺程の高さを有する差物で固め、表側の西側10畳と裏側の6畳にのみ内法長押を用いていた。なお、最も太い東側10畳北西隅の柱は、差物の四方差となる。床は、0.6~0.7尺角の大引を正面側が2間半2つ割、背面が2間2つ割で桁行に渡す。但し、背面6畳のみ梁行に大引を渡し、交差させて0.4尺×0.35尺程の根太をおよそ1.5尺の間隔で配置する。天井は上手の2室が棹縁天井である以外はいずれも根太天井で、表側の3室、裏側の6畳は床梁を組んでのものとなっていた。

軒は4面とも5尺程の軒の出とするせがいで造であるが、正面は桁行の中央柱列から3間も伸びる梁材先端をせがいで梁とし、背面及び側面は上屋柱筋から半間を持出す形式であったが、特に側面では根曲がりの材を巧みに用い、裏側は小屋梁などで重さをかける形式となっていた。

小屋梁は7間半程の長さで、1.2尺程の径を持つ敷梁を2本継で4列桁行に配し、この上に0.8尺程の径を持つ上屋梁9本を1間半2つ割の間隔で配する。

小屋組は扱首組で、下屋は扱首とする。なお扱首上端は合掌とならず、小梁を組んで全体としては等脚台形となり、上辺中央に建つ棟束が棟木を受ける珍しい形式となっていた。なお、小屋組内では差物直上が2層目、これより8尺程上の上屋梁上端を3層目、更に扱首内部を2分し、上屋梁上端から5.4尺程の高さで前後の扱首間につき梁を渡しここを4層目としていた。

茅葺の屋根は葺き厚4尺程度で、平は8.5/10程、側面は16/10程の勾配となる。

当初の形式

当初の平面形式を考察すると、部屋境が移動した痕跡は見られなかった。正面側縁はつなぎ梁の納まりがやや姑息であるが、当りに風食が見られないことから、中古としても早い時期のものと考えられた。

壁は竹釘を用いて間渡を下地に組む、北陸を中心とする日本海側地方独特の形式であったが、これは正面側の風呂も同様の納まりであった。但し、この技法はかなり後の時代まで用いられたため、一概に判断することはできないが、風呂も早い時期のものともよいようである。土間は、東北隅の物入が中古で、当初は10畳との境に板縁が廻っていたと考えられ、ここに階段もついたものと想定できる。以下、主屋における改造は少なく、背面下手の6畳広さ板の間も当初であるらしい。但し、背面下屋では風呂が中古で、台所は当初からあったものの、低い高さに梁の痕跡があり、土間で、桁行5間に梁行1間程度のもので想定される。

さて、当建物の建築年代であるが、聞取りによれば平成15(2003)年の段階で95才となる当主の先代が生まれる8年前に建築されたということであったため、これを換算すると明治33(1900)年頃の建築と推定されることとなる。なお、建物からは和釘が発見されず、いずれも洋釘による仕事であった。その点から見ても、明治時代中

期以後の建築と見て間違いはないであろう。

一方、上手2室の部屋境襖下貼からは、大正14(1925)年の年号を持つ文書断片が発見された。誌面は当家に関係のない公文書であり、年号より数年は下って使用されたものと推察され、大正時代末から昭和時代初期にかけての時代に、建物の整備が行われたものと判断された。聞取りによると先代の婚姻がこの時期であり、それに併せて建物の整備が行われてものと推察されよう。なお、後述するようにこの建物の屋根茅の葺替えを実施した。作業はボランティアを中心に、屋根職2名の参加も得たが、この内1名は昭和40(1965)年代初頭における当住宅最後の葺替えに携わった職人であることが聞取りから確認された。

修理・保存活用

「油田の茅葺民家の葺替えを行い、ここを子ども達のための施設として活用したい」。平成15(2003)年初頭、長岡市川崎在住で、豆腐屋を営む佐藤茂氏からこのような相談を受けた。青少年育成事業に長く携わっている氏の朴訥ではあるが、熱の籠った言葉に心が動かされた。冬期間は積雪のため近づくこともままならないため、雪解けを待って、建築調査に取り掛かった。まず図面採取と写真撮影を実施し、併せて腐朽調査を実施した。

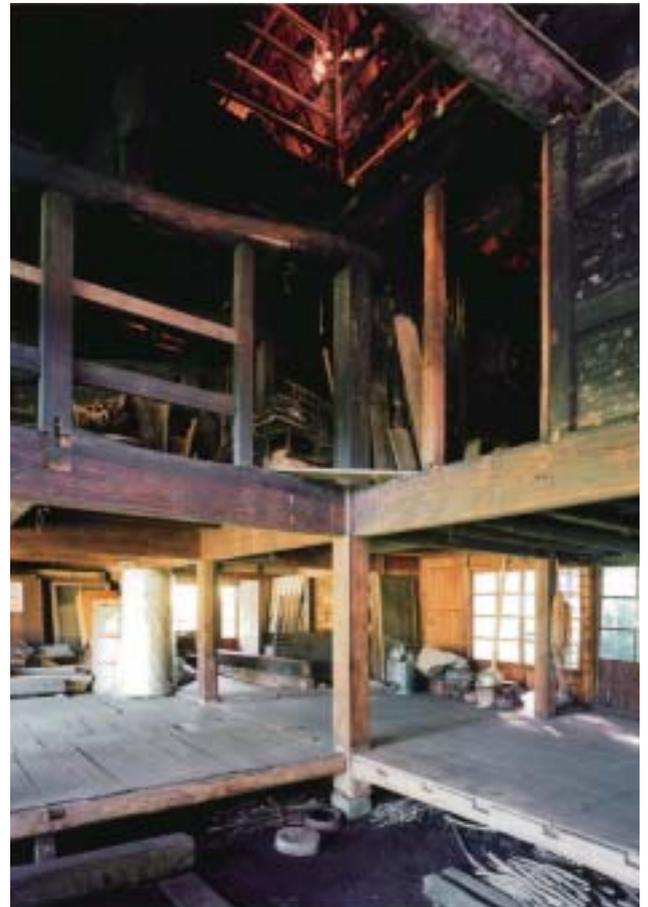
20年来の無住期間があり、屋根の茅は随所で雨漏りを来していた。1階では表側西10畳と背面12畳の板の間で一部の根太まで重大な腐朽が見られた。床板は表側西10畳、7畳半、東10畳南東隅柱附近、背面6畳と4畳半南側、12畳板の間囲炉裏周囲で腐朽が著しく、その周囲も交換の必要があった。天井板、天井梁は床板の腐朽に対応し、その直上部分での腐朽が著しく見られた。内部は4層になっているにもかかわらず、ここで挙げた室内各所では強い降雨時に雨漏りのため水たまりができていた状態であった。また、正面側東10畳と7畳半境に架かるせがひ梁は根元から腐朽のた



外観 南より



外観 西より



内部

め折れ、交換の必要があった。

平成15(2003)年度は内装の改修、屋根のビニールシート養生、茅刈り作業を4回に渡り実施し、延べ1,000人近くに及ぶボランティアの参加を得た。

平成16(2004)年度は、前年度末から5月にかけて茅の葺替え作業を実施した。作業は先ず茅降ろしから始まり、軒付、平葺き、棟を葺上げた。また、内装の整備を行い、2層目には農具・民具の展示を行った。

この間、建物の整備に併せもう1つの趣旨である青少年育成事業として平成16(2004)年度は、6月に田植え、ホタルを見る会、8月に海外青年交流としてイスラエル、パレスチナの青年を受け入れ、9月に稲刈、10月に茅刈、芋の会、11月に餅つき大会を実施した。

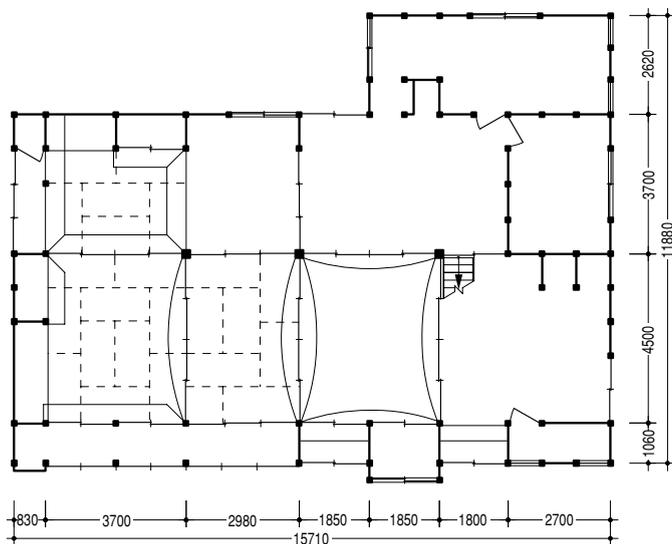
さいごに

最初見た時、今にも朽ち果てしまいそうな民家が、里山に風景と

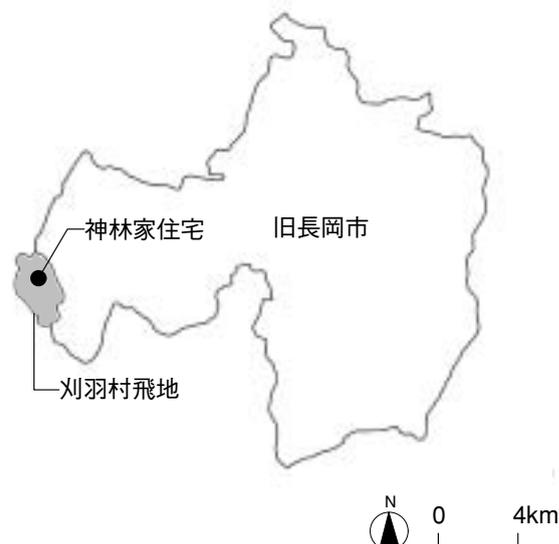
して溶け込んでいたのを強く覚えている。この民家を残せるのだろうか?と、いう疑問を1度も抱かなかつたわけではない。しかし、この建物を“残せる”と確信するに至ったのは、12月の寒中、100人を超えるボランティアが雨中、黙々と神林家近隣の山で茅刈を行っている現場に立ち会った刹那であった。

研究者の立場として、建物の歴史的価値と建物の性格、修復すべき方針を打出し、整備も順調に進んだと言える。歴史的建造物の活用は課題とすべき点も未だ多く、現在でも手探りの段階である。その点、本計画は周辺環境に負うところも大きいですが、青少年育成施設として活用し、その成果は全国的に見ても有効と考える。

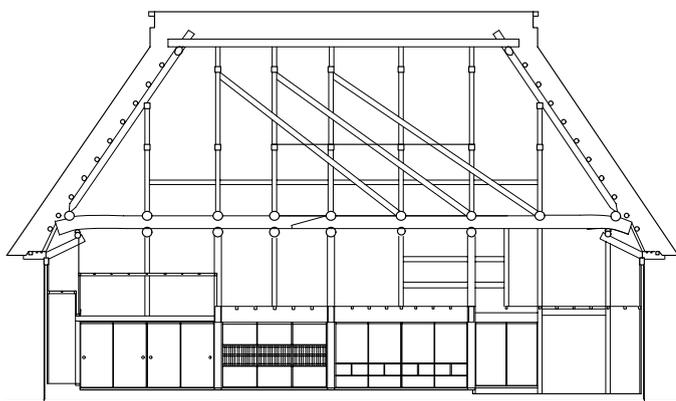
最後になるが、一連の事業では公益信託大成建設自然・歴史環境基金、第4回財団法人こしじ水と緑の会 朝日酒造 自然保護助成基金、刈羽村をはじめとする助成を受けた。記して各団体に謝意を表するものである。



神林家住宅平面図



神林家住宅位置図



桁行断面図



梁行断面図